

先人たちの声に耳を傾ける

光塩女子学院中等科 3年
新保 萌々子

私の住む高円寺では毎年8月、阿波踊りが開催される。国内外から人が集まるこのお祭りは私の誇りだ。しかし、その賑わいの裏にある戦争、歴史の影を私は知らなかった。

それを知るきっかけとなったのが、昭和館のオーラルヒストリーだ。空襲後、家に帰った時を回想した「駅に降り立ったら全てが焼け野原」「ぽっかり穴が空いていた」という小堀初枝さんの証言に、胸が締め付けられた。更に、困窮から学校を中退し働くことになり、「学生に会うのも嫌だった」という言葉から、戦争は命や建物だけでなく、日常や希望までも人々から奪ったものだ痛感した。

私の住む街は昔どんな姿だったのだろう。調べてみると、空襲被害を色で示す地図に出会った。一こども空襲を受けていたの？そこには自分の家がある場所が真っ赤に染まっていた。さらに、近所の公園も、通っている学校さえも、空襲の被害があったようだ。改めて突きつけられた事実胸が苦しくなった。終戦から80年経った今、戦争の惨禍の爪痕がほとんど見えないほど街は発展している。しかし、新しい建物、草木、そして今私が立っているこの地面も、戦争の時代を経て今に繋がっているのだ。そう頭では分かっているけど、どこか現実とは思えなかった。

更に調べを進めると、阿波踊りと戦争の関係が見えてきた。昭和20年、焼け野原となった高円寺。その後商店街の青年部が街の賑わいを求め、阿波踊りを立ち上げたという。そして、多くの人の「街を盛り上げたい」という願いは現代まで脈々と受け継がれている。オーラルヒストリーの証言にあった、戦後、子どもながら親と共に働き「復興に尽くした」という高野文太郎さんの言葉をふと思い出した。先人たちの復興に懸ける強い思いが、今の豊かな暮らしの土台を築いていたのだ。

街に出ると、多くの人賑わっていた。今日は阿波踊りが開催される日だ。街行く人たちの顔には笑顔が灯り、活気に溢れるこの景色も、以前とは違って見える。私は今まで、「戦争」というものをどこか、遠くの世界の出来事のように感じていた。しかし今回、自分の街の昔の姿から先人の復興に対する思いや心情を知り、感謝の気持ちでいっぱいになった。それと同時に、こんな悲惨な戦争は二度と繰り返されてはいけない、そして自分の街が再び焼け野原になる姿を見たくない、そう強く思った。これまで街を発展させてくれた先人たちからバトンを受け取った私たちにできること、それは、過去を学び続ける姿勢を持つことだ。戦争の爪痕が見えづらくなっている今、戦争は簡単に風化してしまいそうになる。その中で、オーラルヒストリーを通して、紙や写真だけでは知り得ない証言者の方の経験や心情を知る機会は重要だ。先人たちの思いを大切に、戦争がもたらしたものを未来に伝え続けていくことが私たちの使命なのではないかと感じた。

審査員からのコメント

【岸本葉子さん・エッセイスト】

戦争は命や建物だけでなく、日常や希望まで奪う。昭和館の展示で学んだこのことを、昭和館のみでの体験に終わらせず、自分のいる場所に結びつけて、調べていく探究心がすばらしい。

過去を学び続けることの大切さを、作者自身の実践によって伝えている。現在の平和な光景から、直接には知り得ない、先人たちの苦難と努力の歴史を、この作品のようにして理解する試みが全国各地に広まることを願う。

【関沢まゆみさん・国立歴史民俗博物館教授】

新保さんは、昭和館のオーラルヒストリーで、空襲後、家に帰った時、「駅に降り立ったら全てが焼け野原」「ぽっかり穴が空いていた」という女性の証言に胸が締めつけられたといいます。

また、その女性は、困窮のため学校を中退して働くことになり、学校に行けた「学生に会うのも嫌だった」といいます。その語りに、新保さんは、戦争が生命や建物だけでなく、人間の日常の生活や希望まで奪うこと、戦争のひどさを痛感したことがわかります。

そして、自分の住む町も空襲にあった「事実」を突き付けられます。そのなかで、オーラルヒストリーで、子どもながらに親とともに働き「復興に尽くした」という男性の言葉を思い出し、当時の人びとの復興にかける強い思いがいまの「豊かな暮らしの土台」を築いたことに気づいているところがたいへん良かったと思いました。